
万神奮闘記！

石榴石 歩馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

万神奮闘記！

【Nコード】

N2724E

【作者名】

石榴石 歩馬

【あらすじ】

八百万生徒会騒動記！の短編集。生徒会だけでなく万神高校にいる人々をも巻き込んだ、普段の日常から行事まで、彼らの生活を覗いてみませんか？（これ単品でも読むことができます。キャラ紹介あり）《不定期更新》

登場人物紹介（前書き）

随時更新予定。

おおざっぱですが、一部詳細情報もあり。

登場人物紹介

くみやさん
紅宮沙炎

身長：172センチ

体重：57キロ

髪：茶色。癖毛で長い。

目：黒色。つり目。

その他：1年J組（普通科）所属。生徒会役員（一年執行部長）。寮生（男子寮206号室）。

備考：（一応）主人公。見た目は不良っぽい。

本人から一言：

「一応ってなんだよ!？」

やなぎあずみ
夜凧鴉澄

身長：158センチ

体重：秘密

髪：黒色、長さは肩くらい

目：黒色

その他：1年J組（普通科）所属。生徒会役員（情報部）。寮生（女子寮113号室）。美術部員

備考：サタンの幼なじみ。演技派。

本人から一言：

「幼なじみ。……間違っていないけどなあ」

そらみねかなた
空嶺彼方

身長：161センチ

体重：49キロ

髪：白に近い灰色。前髪が長い。

目：墨色。普段は前髪で隠れている。

その他：1年A組（普通科選抜）所属。生徒会役員（執行部）。寮生（男子寮206号室）

備考：サタンの友人にして寮の同室者。無口。

本人から一言：

「……………」

とつかすさ
十握須佐

身長：175センチ

体重：65キロ

髪：金髪。右目の前だけ長い

目：左・黒色

その他：1年L組（商業科）所属。自宅通学。

備考：サタンの友人（？）。ミコト、ミカミの従兄弟。バカ。

つくよみみこと
月読命

身長：167センチ

体重：秘密

髪：黒色。腰くらいまである

目：黒色

その他：2年A組（普通科理系選抜）所属。生徒会役員（2年執行部長）。自宅通学。

備考：スサ、ミカミの従兄弟。常識人。

黄泉津平坂^{よもつひらさか}凧^{なぎ}

黄泉津平坂^{なみ}波

身長：143センチ（二人とも）

体重：秘密

髪：黒色ツインテール（二人とも）

目：茶色（二人とも）

その他：凧・2年M組（理数科）所属。生徒会役員（事務部）。寮生（女子寮204号室）

波・2年N組（理数科）所属。生徒会役員（事務部）。寮生（女子寮204号室）

備考：双子。髪ゴムとTシャツがオレンジなのが凧。ピンクなのが波。見た目小学生。自称天才科学者。マサト、ユウスケとは幼なじみ。

紅宮^{くみやくろす}玄守

身長：180センチ

体重：68キロ

髪：黒色。オールバック？

目：黒色。切れ長。

その他：三年F組（普通科文系選抜）所属。生徒会役員（副会長）。寮生（男子寮寮長・101号室）。弓道部所属。

備考：サタンの兄。口が悪い。

あまてらすみかみ
天照美神

身長：178センチ

体重：秘密？

髪：白。長い。

目：赤色

その他：三年F組（普通科文系選抜）所属。生徒会役員（生徒会長）。自宅通学。

備考：スサ、ミコトの従兄弟。サボリ魔。

しばたくと
司馬拓斗

身長：170センチ

体重：60キロ

髪：黒色。

目：黒色。

その他：一年J組（普通科）所属。クラス委員。自宅通学。

備考：サタンによく突っかかってくる。無駄に真面目。

とがみまさこ
兎上雅人

身長：黙秘（おそらく150センチ台半ば）

体重：45キロ

髪：赤色。

目：茶色。目つきは悪い。

その他：二年M組（理数科）所属。生徒会役員（執行部）。寮生（男子寮312号室）。生物部所属。

備考：ユウスケ、ナギ、ナミの幼なじみ。女顔（可愛い系）。ちょっと気が短い。

しづけい
子津雄助

身長：157センチ

体重：45キロ

髪：青みがかった黒。

目：黒色。少しタレ目。

その他：二年N組（理数科）所属。生徒会役員（情報部）。寮生（男子寮312号室）。生物部所属。

備考：マサト、ナミ、ナギの幼なじみ。女顔（綺麗系）。色々と黒い。

このみ たちはな
木実・K・立花

身長：175センチ

体重：59キロ

髪：蜂蜜色。肩くらいまでのセミロング。

目：黒色。

その他：三年A組（普通科理系選抜）。生徒会役員（三年生執行部長）。寮生（女子寮寮長・101号室）

備考：関西弁で男口調。イギリス人とのハーフらしい。神出鬼没。

弓継射手 ゆみつぎいて

身長：184センチ

体重：72キロ

髪：黒つぽい茶色。

目：茶色

その他：三年C組（普通科理系）。弓道部部长。自宅通学。

備考：クロスの友人。お人好し（？）

調理実習 / 4月下旬（前書き）

八百万生徒会騒動記！を読んでいないとわかりにくい部分があります。

紅宮サタン視点。

調理実習 / 4月下旬

高校に入学してからはや半月近く。4月も終わりに近づき、寒さが暖かさに切り替わったある日の七限目。

俺とアズミを含む一年J組の生徒四十人は、特殊課教棟一階の第二調理室に来ていた。

「ねーサタン、お願いだから手伝ってよー」

「断る。……それに個人で作らないと駄目なんだろ。無茶言つなアズミ」

何故こんなところに来たのかというところ……まあ大体予想はつくだろうが、家庭科の調理実習があるからだ。

隣りで色々言っているアズミは放っておいて、近くホワイトボードに貼られている紙を見る。

クッキーから始まり、ホットケーキ、ビスケット、カップケーキ、ブラウニー、プリン、ゼリー、パフェ、ドーナツ、ムース、シュークリームにケーキ……等々、大量の様々な洋菓子のレシピが教室黒板の半分ほどしかないボードに所狭しと貼り付けられているのかなりすごい光景で……しかもその全てが、一つ一つ丁寧に手書きされた物だからなおさらだ。

「えー、皆さん。ちょっと聞いて下さい」

のんびりとした声に、クラスのほぼ全員（友人と話している数人以外）が顔を向ける。

そこにいるのはあまり特徴のない黒髪の男性……家庭科担当の星^{ほし}河^{かわ}先生だ。確か本名は星河夜彦^{やひこ}。男で家庭科教えてるのって珍しい

よな……。似合ってるからいいけど。実際料理かなりうまいし。
ちなみにさっきのレシピ類は全部星河先生の手作りらしい。何十冊もの料理本からの選り抜きだとか。……………すげえなあ。

「…………ン、サタン！先生の話聞きなよ！」
「はっ！」

危ない危ない、ちょっと意識がトリップしてた。慌てて先生の声に耳を傾ける。

「前の授業でも言いましたが、今日は個人でお菓子・デザート類を作ってもらいます。大半の人は自分でレシピを持って来ていると思いますが、忘れた人は横のホワイトボードに貼ってあるレシピを使ってください。調理台や道具などは同じ物を作る人なるべく共有して使うようにしましょう」

そりゃこの大人数だしな。でも……………

「…………調理台、二十はあるから二人で一つ使えるよな？」
「だよねえ…………」

まあそこらへんは片付けが大変だからだろう。いくら広いとはいえ、時間や労力、水道代とかもタダじゃな…

「そして今回の材料は全て理事長が用意してくださったこれらです」
そう言っ先生が一番奥の調理台に掛けられていた白布をめくると…………

「……いつもながら、ここの理事長は馬鹿か？」
「お金持ちの考えることはわからないわね……」

そこにあつたのは色とりどりの果物とこれでもかというほどのお菓子の材料。生クリームから粒あんにこしあん、チョコレートにフレーク、カラーチョコスプレーなど……ホットケーキミックスもあるな。

つまり、お菓子作りに必要と思われる食料、材料……おまけに調味料が全て揃えられていた。とはいえ、これは別におかしいことじゃない。それぞれが何を作るかわからない以上、材料はあるに越したことはない。だが……

「三大珍味はいらないだろ。誰がクッキーとかにトリュフを使うんだ」

「いや、燕の巣もいらないでしょ。フカヒレもだけど」

普通にお菓子作りどころか一般的な料理にさえ使われていないような食材が混じっていた。それをどう使えと言うんだ理事長。さすがあの生徒会の創設者だけはある、ネジが一本どころか百本くらい外れているようだ。

「では、各自作り始めて下さい。時間は一時間から二時間ぐらいでお願いします。僕は見回りをしていますので、完成した人ら呼んで下さい。完成品のチェック後は、隣の空き教室で食べて帰るか、持ち帰ること。食べ歩きなどはいけませんよ」

先生すげー……。いくら先に知ってたとはいえど、皆が啞然としているなか平然と話を進めるとは。絶対驚きすぎて話聞いてない奴いただろうな。

ま、俺には関係ないし、作り始めるとするか。

「アズミ、ちゃっちゃと適当な台取つとくから、材料取って来てくれ」

「了解。何がいる？」

「ん、この紙に書いてあ……」

「ふん。それが人にものを頼む態度か、紅宮サタン」

いきなり会話に割り込んできたイヤミつたらしい声。……はあ、面倒な奴が来た。

「他人の顔を見るなりいきなり溜め息か？常識的な対応とは思えないな」

「そりゃ失礼。で、何の用だ司馬^{しり}。イヤミを言いにきたのか？」

司馬拓斗^{たくと}。それがこいつの名前だ。」組のクラス委員だが、なんでもか事あることに俺に突っかかってくる鬱陶しい奴。なんかしたか俺？

「イヤミなどではない。一般的な意見を言っただけだ。それにお前に用事などない。僕はただお前の夜凧さんに対するその態度をどうにかしろと言ってるんだ」

「そう言われてもな、俺は昔から大抵の奴にはこう接しているから今更変えるのは無理だ。それに俺はお前の高圧的な態度の方をどうにかした方がいいと思うぞ」

「……何だと？」

「聞こえなかったか？ならもう一回言ってやる。俺はお前の……」

「はいサタン相手を挑発しない！」

「痛っ！」

アズミが口を開いたと同時に頭に衝撃が来た。……危ね、舌噛む

とこだった。

「何すんだよアズミ」

「それはこっちのセリフよ。……ごめんね司馬くん、この馬鹿が失礼なことを」

「いつ、いや！夜風さんが謝らなくていい！悪いのは紅宮なんだし！」

「そう？でもこいつの言うこといちいち気にしないでいいよ。適当なことばかり言ってるんだから」

「……おい、それは俺に失礼だろ」

「黙んなさい」

一刀両断。俺の意見は切って捨てられた。まったく、アズミの中で俺の評価はどうなってるんだ。……馬鹿というか、勉強ができないのは否定できないが。

「だからサタンのわたしへの態度も気にしないで。もう慣れちゃったし」

「……夜風さんがそう言うなら」

「ありがとう。じゃあ、わたしは材料とか取ってくるから……」

サタン、喧嘩売らないでよ。司馬くん、ほんとごめんね」

「あ、ああ……」

「へーへー、よろしくー」

アズミが材料の所へ行くのを見送ったあと、司馬がピクリとも動かないので不審に思って顔を見てみる。……なんか上の空っぽいな。

「おい司馬。顔が真っ赤だぞ」

「……っ！何でもない！」

「にしては熱心にアズミを見てたような」

「違う。断じてそんなことはない！」

「あつそ。そんなに勢い良く否定しなくてもいいだろ。冗談だよ、じよ・う・だ・ん」

「……………」

すつげえ鋭く睨まれた。でも心なしかまだ顔が赤いからそんなに迫力ないな。……………わかりやすいし、面白い反応するよなあこいつ。鬱陶しいけど。

「……………そうだ紅宮。僕と勝負しないか？」

「は？勝負？」

「ああ。……………今から二時間以内に最低一品、菓子を作る。そして星河先生に高評価をもらった方が勝ち。それでどうだ？」

「別にいいが……………男が料理勝負ってどうよ？」

「……………そんなこと言って、負けるのが怖いんじゃないのか」

ふん、と嘲るように司馬が言った。……………向こうから挑発してきたんだし、喧嘩じゃないからいいよな？この場合は。

「そんなことは一言も言っていない。やってやるよ。で、勝った方にはなんかあるのか？」

「定番だが、勝った方は負けた方に一回命令できる、でいいだろう」「別にいい」

「ふつ、そんな余裕そうにしてられるのも今のうちだ」

なんか捨て台詞っぽい言って離れていったけど、あれだけ言うってことは料理の腕に自信があるんだろうな……………面倒くさいが、あそこまで言われたら手を抜くわけにはいかないし。

……………頑張るか。

あれから約一時間半後。クラスの奴の大半は一時間ぐらいでクッキーやらドーナツやらの簡単な物を作ってさっさと帰ってしまったので、現在調理室に残っているのは十人もいない。ちなみに、俺と司馬以外の男子は全員帰ったため残りは女子である。

俺も一時間でほぼ完成したので、今は飾りつけの生クリームをかき混ぜている最中だ。ミキサーはなんとなく嫌なので、泡立て器での手作業。時間はかかるが……地味に楽しい。

「……ねえサタン」

「ん、どうした」

カップケーキを焼いていたオーブンを覗き込んでいるアズミが、ゆっくりと顔をこっちに向けた。やけに時間がかかっているのは、一度砂糖と塩を間違えるというとてもなくベタな失敗をして、慌てて作り直したからだ。ちなみにそれに気付いたのは俺だったりする。……って、なんで泣きそうなんだ!?

「お、おい。ほんとにどうしたんだよ!？」

「……カップケーキ、ちよっと焦げちゃった……」

そう言って取り出してきたのは、お菓子作り用のカップ。あー、確かに上が少し焦げてるな。でもこれくらいなら……

「どうしよう……。結構うまくいったのに……。……ってサタン！？」

「ちょっと失敬」

ぱくり、と一口。……オープンから出したところだから熱いな。でも甘すぎず薄すぎず、味が調っていてうまい。

「焦げたところが少し苦いけど、うまいよ。それにこれぐらいなら焦げた部分削っても大丈夫だよ」

「わかった。……でも勝手に食べないでよ。罰としてそれ一個ちゃんと全部食べることにしよう。いい？」

「はいはい。……あ、そうだ。削った部分にこれ飾ったらどうだ？」

「生クリーム……いいの？」

「ああ、どうせ余るし。クリームのせてチョコスプレーでもかけたらアクセントにもなるだろうし」

「……ありがとう」

「？なんか言ったか？」

「なんでもない。あ、わたしの一個あげたんだから、サタンのも一個もらおうよ」

「好きにしてくれ」

「やった！」

泣きそうだったたり笑顔になったり、よく表情が変わること。そんなに喜ぶ事か？……っと、生クリームそろそろいいな。

「おい、生クリームできたから必要なぶん先に取っといてくれ」

「わかった」

「えっと、生クリームしぼるやつは……」

「これじゃない？」

「あーそれぞれ。サンキユ」

さて、後は飾り付けだけか。そういや、司馬の方はどうなんだろう？

で、今俺と司馬は星河先生の前に自分が作った物を持ってきていた。

と言っても司馬が作った小型のケーキ（だから遅かったんだな）の試食が終わり、先生から

「見た目も食感もいいが、砂糖を少し入れすぎ。八十点」という評価をもらって、次が俺の番というわけだ。

「次、紅宮くんどうぞ」

「あ、はい」

俺が作ったのはカスタードプディング。いわゆるプリンだ。少し苦めに作ったカaramelソースにホイップクリームを少量乗せて、薄いカットチョコを刺した俺のオリジナル。星河先生、料理には厳しいからな……。さて、どうだ？

「……うん。見た目もすごく綺麗だし、味のバランスも抜群。ちょっと難を言わせてもらえば、クリームをほんの少しホイップしすぎかな。……でも、ほぼ完璧。九十七点つてところかな。さすが、紅宮くんだね」

「……あ、ありがとうございます」

「これ、レシピもオリジナルだね？あとで教えてもらっていいかな」

「いいですよ。あ、代わりに先生のやつもいくつか教えてもらっていいですか？」

「ええ、勿論」

先生のお菓子レシピ……やった。これでまたレパートリーが増える。

「え……つまり、これは」

「悪いな司馬。俺の勝ちだ」

「さすがだねサタン。先生のレシピもらったら今度なんか作ってよ」
「ん、試食でいいならな」

呆然としている司馬を後目に、道具の片付けを始める。終わったから先生のところ行かないとな。他の生徒も全員帰ってるから問題ないだろ。

「……どういうことだ紅宮。お前、料理できたのか……？」

「え、司馬くん知らなかったの？サタンは料理好きだしできるし、下手なお店行くよりかなり料理上手いよ」

「それは言い過ぎだ。さすがに店には勝てないぞ」

「そんなことないって」

アズミが言ったように、俺は料理がかなり好きだ。スポーツ以外の唯一の趣味と言っていいくらいだし、店とまではいかないがまあまあ上手いと思う。大抵の料理なら頭に入ってるから、本とかレシピとか見なくても作れるしな。

「……そっ、それにさっきの話しぶりからして、お前と星河先生っ

て仲いいのか？さすがとか言ってたし……」

「うーん、なんて言うか……料理仲間？」

「は？」

「星河先生は生徒会の担当もしてるだろ？たまたま話したとき料理のことで意気投合したから、時々料理の作り合いしてるんだよ」

「ああ……どうりで」

「まあそれは勝ち負けには関係ないし……そっちから持ちかけて来たんだから、今更ナシとか言わないよな？」

「っ、と、当然だ！」

「じゃあ命令は考えとくからそこどいてくれ。片付けの邪魔だ」

「あ、わたし手伝うよ」

「ああ」

さて、何のレシピをもらおうかな？

「……くそ、紅宮サタンめ……」

帰るときに司馬がそう小さくつぶやいたことを、サタンとアズミは知らない。

おまけ

ちなみに数日後、一年A組が同じように調理実習をしたとき、何故か爆発が起きたらしい。

「……………少し失敗……………」

「爆発するようなことは少しとは言わねーんだよ。何作ってたんだ？」

「……………パフエ……………」

「どこに爆発する要素があるんだ！？それになんで疑問系！？」

というのが、当事者とその友人の会話である。

調理実習 / 4月下旬（後書き）

短編集初挑戦です。八百万の方から読んで下さっている方、しばらくはこちらをよろしくお願いします。

短編集ですのでいつの話なのかバラバラです。サブタイトルに時期を入れていきますので、話数が増えてから時系列どうりに読みたいという時は参考にしてください。

幼なじみ×4/4月中旬(前書き)

紅宮サタン視点

幼なじみ×4 / 4月中旬

現在、俺は走っている。

別に体育とか運動会の練習とかじゃないぞ。それに運動会は4ヶ月は後だ。あー、でも楽しみではあるな。基本スポーツは好きだし得意だし、ってかそうじゃないとスポーツ推薦なんか取ってないけど。ここの運動会けっこう大規模らしいし……こういうのを待ち遠しいって言うのか？

って現実逃避してる場合じゃない！運動会に参加するには生きていることが大前提だが、このままじゃ俺の命が危ない。
なぜなら……

「「サタンクーーン」」

「ちよつとー」

「待ってよー」

「誰が待つかあああ！！」
「風先輩も波先輩も、自分の言動考えて言うてください！」

とまあ、風先輩・波先輩の自称天才科学者に追いかけられているからだ。なんでそんなことになったかというところ……

「言動って」

「私たちはただ」

「「実験台になってほしいって言ったただけなのに」」

「それが最大にして最も根本的な原因だー！！」

廊下でばったり会っていきなり

「これ飲んで」って謎の液体X（緑色・どろどろ・泡立ってる）を飲まされかけたら誰でも逃げるだろうよ。さらに追いかけて待つ奴がどこにいる。いたらそいつは勇者だな、心の底から賞賛してやろう。ただし生きていたらの話だが。

「というか………なんであの二人は俺について来れるんだ！？スポーツ推薦の奴と同じだけ走れるって………もう科学者じゃないだろ！？そりゃ科学者がスポーツできてもおかしくないけど、こんだけ速いなら陸上部にでも入れ！！

にしても、このまま逃げてたって埒があかないし………スサにでも押し付けるか。たぶん生徒会室にいるだろう。

ってことで進路変更。すぐそこに見えている渡り廊下を右に

「うおっ！？」

「うわ！」

「つとお………いてっ！？」

痛………盛大にこけた。………っ！か危うく人にぶつかる所だった。ギリギリ避けたけど自分がこけたら意味ねーよな……。ってヤバい、あの二人に追いつかれる！！

「あの、大丈夫？」

「ビタン！ってあんま人体が出していい音じゃないぞ………ん？もしかしてお前、副会長の弟か？」

「え？」

「あ、確かに紅宮君だ」

立ち上がる途中に声をかけられたので、顔だけ上を向く。そこにいたのは最近知り合った赤髪と黒髪の二人組だった。

「………^{とがみ}兎上先輩に^{つひ}子津先輩？」

「お、当たり」

「そんなに急いでどうしたの？何か用事？」

兎上雅人まろこと子津雄助ゆすけ。この前生徒会の顔合わせの時に初めて会った二年生の先輩だ。赤髪なのが兎上先輩、黒髪なのが子津先輩。えっと、他にも何かあったような……まあいいか。

「用事があるわけじゃないんですけど……あれ、先輩達はもう帰りますか？」

「ん？いや、部活。めんどいけど」

「新入部員との顔あわせだって。だから生徒会に顔だけ出してきたんだ」

「へえ……」

部活かあ……生徒会忙しいのによくやるなあ。でもそういや全校生徒の半分は部活入ってるって聞いたし、そんな珍しいことじゃないか。

立ち上がり服についた埃を払ったあと、改めて二人に向きなお……

……うん、小さい。

何が小さいかって全体的に。言っちゃ悪いが兎上先輩も子津先輩も確実に身長が平均もない。わずかに子津先輩の方が高いが、それでも俺より頭半分は低いだろう。それに加えて……

「……人の顔じろじろ見んじゃねえ。なんかおかしいところもあるのか？」

「え、いやなんでもない……です」

二人ともかなり顔が整ってるんだが、本人としては嬉しくないだろうほどの……女顔だ。特に兎上先輩はそこら辺の女子じゃかなわないくらい可愛いらしい顔立ちをしている。子津先輩はどっちかつ

て言つと綺麗系だ。まあつまり……とある特殊な趣味を持つ方々にとっては格好の餌食になりそうな二人組なわけだ。もちろん俺にそんな趣味はないから、苦労してるんだろうなあと思うだけだが。

「あの、紅宮君？ちよつと……」

「へ？」

「……………女顔で悪かつたなあ、紅宮弟」

子津先輩の声で意識が現実に戻る。そして見えたのは、肩を震わせ握り拳を作っている兎上先輩。…………これって、もしかしくなくてもヤバイよな？

「えーと、先輩？」

「…………なんだ」

「聞こえて……………ました？」

「お前が……………女顔つて言つたところまでなら、な！！」

「ぐえっ！？」

腹のド真ん中にストレートパンチ。鳩尾を外れたのはせめてもの情けなのか。それとも単なる偶然なのか。どちらにしても……………地味にマジで痛い……………

「……………紅宮君、二回目だけど大丈夫？」

「はっ、自業自得だろ」

「それ殴つた本人が言うことじゃないよね。それに、女顔は事実でしょ」

「……………それをお前が言うか？」

「さあね。あーあ、事実を言っただけなのに殴られるなんて、紅宮君かわいそー」

……なんか子津先輩の言葉にかなり毒が含まれてる気がするんだが。しかも言い方的に絶っ対可哀想って思ってたないよな。

「当然だよ。マサトほどじゃないけど、僕だって女顔って言われるのは嫌なんだから」

「……すみませんでした」

「ま、いいよ。事実なのは否定できないし」

「俺はまったく良くないんだが」

「はいはい、いつものことでしょ。なんでいい加減慣れないかなあ」
「慣れたくもねーよ！」

……なんか俺そつちのけで口喧嘩始まったんですけど。って言うても兎上先輩が何か言ったのを子津先輩が全部受け流してるから、喧嘩じゃないのか？

「……くそ、おい紅宮弟！お前もなんかこいつに言ってるやれ！」

「え、……ええ！？俺ですか！？」

「お前以外誰がいる！」

いやそんなこと言われても……

……そういや、なんか忘れてるような……

「「サーターンークーん」」

……今なんか聞こえた気がしたが、きつと幻聴だろう。うん、幻聴だ。幻聴であってくれ！！

「「おーいついた」」

追い付かれたああああああああ！！

恐る恐る振り返った先には、予想通り自称天才科学者の双子が立っていた。そして、オレンジの服のナギ先輩の右手には謎の液体Xが……

逃げないと、今すぐ逃げないと危険だ。俺の命が終わる！でも正面には兎上先輩たちがいるし……俺にどうしろと！？

「あれ？」

「マサくんだ」

「ユウくんだ」

「よお、ナギ」

「やあ、ナミ」

「……何してるの（んだ）？」

うわ、ソプラノとボーイソプラノの四重奏……じゃなくて。なんか急にナギ先輩とナミ先輩の様子が変わったし、兎上先輩と子津先輩はあの二人に普通に接してるし……。しかも名前で呼び合ってたよな？

「えっと……皆さん仲良いんですか？」

「……幼なじみ」

なんであなた方そんなにタイミングぴったりなんですか。打ち合わせでもしたのかってくらい見事な揃い方だぞ。

あー、兎上先輩たちのことで忘れてたのってこれか。そういや自己紹介のときにそんな感じのこと言ってたな……

「で、なんでお前らここにいるんだ？」

「放課後になっていきなり教室飛び出してたしね。何してたの？」

「……んーと」

「これを」

「誰かに」

「飲んでもらおうかなって」

そう言つて双子が差し出したのは謎の液体X。……いつの間にか色が紫になつてゐる。何で出来てんだよアレ。

「はぁ……またそんなの作つてたのか」

「で、紅宮君をその実験台にしよう？」

「「うん！」」

うん、じゃねーだろ！！……この双子に関わると疲れるな……。といつても向こうから関わってくるから避けようがないんだが。それに兎上先輩も子津先輩もあつさりしすぎだ。あんな危険物作る前に止めてくれよ……

「ナギ、双子とはいえ一応お前が姉なんだからもう少し自分の行動を考えろよ」

「ちえー、わかったよマサくん」

「ナミ、姉妹なんだからお姉さんの行動がおかしいと思つたら止めないで駄目だよ」

「はい、わかったよユウくん」

「じゃあこの不気味な液体は捨ててこい」

「えー、だったら捨てるからマサくんついてきてよー」

「……はぁ。わかった、ついてくからちゃんと処理しろよ」

「じゃあ、僕はお先に」

「おう、またあとでな。またな、ナミ。紅宮弟もな」

「ユースケくん、サタンくんまたねー」

「またね、マサトくん」

「ああ」

「ナギちゃん、また今度ね」
「うん！」

そう言ってナギ先輩と兎上先輩は歩いて行った。……………えっと、これはつまり……………どういうことだ？

確か最初に兎上先輩がナギ先輩に注意して、次に子津先輩がナミ先輩に注意して、兎上先輩が謎の液体Xを捨てろって言ったら捨てるからついてきてってナギ先輩が……………あれ？なんであんなにあつさり捨てるって言ったんだ？

「紅宮君は本当に考えてることが口にでるね」

「気をつけないとねー」

「……………以後気をつけマス」

ホント何でだろうな……………言ってるつもりはないんだが。

「とりあえず疑問に答えようか。なぜナギちゃんがマサトの言うことをあつさり聞いたか、だったよね？」

「あー……………はい」

「まあ簡単に言っちゃえば……………好きなんだよ」

「……………は？」

「だから、好き」

「……………誰が誰を？」

「見ての通り」

「ナギちゃんがマサトくんを」

へえ、そうなんだ……………って、なんか地味に他人の秘密を聞いた気がするんだが。二人とも、幼なじみもしくは姉の好きな人さらずとバラしたよな？

「……それ、普通にばらしちゃって大丈夫なんですか」

「大丈夫だよー」

「二、三年生ほぼ全員が知ってるしね。気づいてないのはマサトを含めてほんの数人くらいじゃないかな」

「はあ」

みんな知ってるからって教えていいものだとは思わないけどな。

……それよりも、気になることがあるんだが……

「あの、先輩方」

「なに？」

「………お二人は、付き合ってるんですか？」

「あれ、なんでわかったの？」

うわ、普通に肯定した。……そりゃ目の前で手え繋いだり腕絡めたりしてたら嫌でも気づくって。彼女いない歴イコール年齢の俺に對する当てつけか！

「……なんとなくです」

「そう？」

「兎上先輩たちは子津先輩たちが付き合ってること知ってるんですか？」

「いや、知らないだろうねえ？」

「ねえ？」

いや、二人ともに疑問系で言われると困るんだが。……でも幼なじみだったら言ってもおかしくないよな？俺はアズミからそれ系のことは聞いたことないから知らないけど。……にしてもこれだけベタベタしてる二人のことやナギ先輩の気持ち気付かない兎上先輩って………かなり鈍感？

「教えないんですか？」

「いやー、だってその方が面白いから」

「……は？」

「気付いた時とか、絶対すごい反応してくれるだろうからね。いつ気付くか楽しみだよ」

ひでー……。のんびりしてそんな見た目に反して黒いな子津先輩。

「ねえユウくん、部活行かなくていいの？」

「あ、そうだった。じゃあまたね紅宮君」

「またねーサタンくん」

「え、あ、はい」

そう言ったときには二人はもう背を向けて歩き出していた。……
早え。

とりあえず俺も生徒会室に行くか。

「そついえば紅宮君」

反射的に振り返ると、子津先輩が立ち止まりこっちを見ていた。

「さっきマサトのこと鈍感とか言ってたけど、僕は君も大概鈍感だ
と思うよ」

「え？」

「まあ、人の事は言えないってこと。じゃ、アズミさんによろしく」
「ユウくん、先行っちゃうよー」

「はいはい今行くよ」

「『はい』は一回！」

「はい」

そんな会話をしながら、今度こそ本当に二人は歩き去っていった。にしても、俺が鈍い？そりゃ確かに他人の感情が簡単にわかるほど鋭くはないと思うが、さすがに人の好意や敵意くらいはわかるだろ。それに……なんであそこでアズミが出てくるんだ？

……………よくわからない
な。後でアズミ本人に聞いてみよう。

その後、生徒会室でアズミとカナタにこのことを話したら、一人からは平手打ちを一発、もう一人からは珍しい呆れの視線をいただいた。……何故に？

幼なじみ×4 / 4月中旬（後書き）

ちよつと補足を。

幼なじみ四人のお互いの呼び方は、

兎上雅人

・マサト（雄助）

・マサくん（凧）

・マサトくん（波）

子津雄助

・ユウスケ（雅人）

・ユースケくん（凧）

・ユウくん（波）

黄泉津平坂凧

・ナギ（雅人）

・ナギちゃん（雄助&波）

黄泉津平坂波

・ナミ（雅人&雄助）

・ナミちゃん（凧）

となっています。会話のとき誰が喋っているかのヒントにしてください。ややこしくてすみません。

登場人物紹介を更新しました。追加：司馬、兎上、子津の三人。

とある出来事の顛末（1）（前書き）

ある日の放課後から話は始まります。

三人称。

とある出来事の顛末（1）

「しっつれーしまーす」

紅宮サタンが生徒会室の扉を開けると、そこには誰もいなかった。用がなくても入り浸っているうざったらしい生徒会長や、その見張り役である自分の兄、苦労人の女先輩のうち誰一人として姿が見えない。

ちなみに女先輩こと月読ミコトに苦労をかけている人物の中に自分が含まれていることをいまいちサタンは理解していないようである。

「……珍しいな。誰もいな……」

「ここにおるで？」

「はいいいっ?!」

いきなり耳元で聞こえた声に飛び退くサタン。よほど驚いたのか悲鳴が裏返っており、慌てて声がした場所を見た彼は呆然としていた。

それもそのはず、そこにいたのは……

「ん、なんや沙^さの字？化けもんでも見たような顔し」

「化け物よりもある意味特殊だっ！なんで天井に立ってるんだ立花^{たちばな}先輩!?」

天井に足の裏をつけ、地面と逆さまに立つ少女。重力に従った普

段なら肩ぐらいまでの長さの金髪が、つららのように垂れ下がっている。

「ん、これか？これはな……」

サタンの声に首を傾げながら少女が視線を下（この場合は上？）に向けて、そこには髪と同じように重力に従うスカートの姿。つまりは、大きくめくれ上がった（下がった？）スカート。ということは……中身が丸見えになっているわけで。

サタンは仕方なく少女に近付き、両腕を伸ばして相手の腕を掴むとゆっくりと引つ張ってみた。

言われた通りにさらに強く引っ張るサタン。すると少女の両肩が

ら『ごきり』と非常に生々しく痛々しい音がした。

「あ、肩外れた」

「早ー！だから言ったのに！？」

「どうでもええけどな」

「どうでもいい要素欠片もないし？！」

「あっはっはっは」

「笑うな！」

と言いつつもサタンがまだ引つ張っていると、いきなりベリツと少女の足が天井から外れ落下した。

サタンの真上に。

「ぎゃっ？！」

「うわ！」

ドンガラガラガシャーン！！

「ちよつと何ご　　？！」

突然響いた轟音に、遅れてきた夜風アズミが駆け込んで来た。その後ろには開け放たれた扉から中を覗き込む空嶺カナタの姿もある。言葉の途中で絶句したアズミに、ようやく気付いたサタンが振り向いた。

「うー、いつてー……。あ、アズミ？」

「……ねえサタン。なにやってんの？」

「え？あ！これはその……」

ソファやテーブルさえも巻き込んだこの惨状を慌てて説明しようとするサタン。だが……

「この変態」

「は?!」

「立花先輩に何してんのよっ!自分が何してるかわかってんの?!」

なにやらお怒りのご様子のアズミ。疑問に思いながらも改めてサタンは自分を取り巻く状況を見た。

ひっくり返ったソファに動きまくったテーブル。落ちた時に入れ替わったのだろうか、尻餅をついたサタンの足の下には何故か気絶した少女が。そしてトドメに、ぶら下がっていた時のまま彼女のスカートはめくれ上がっており……

それはサタンが少女を押し倒したように見えなくもなかった。

「いや、これは……」

「言い訳無用!!」

「は?!ちよつまっ!助けてくれカナタ!!」

話を一切聞かず足を振り上げたアズミ。それを見たサタンは扉の外で傍観しているカナタに助けを求めるが、カナタは…

「……………」

カラカラカラ、パタン

無言で頷き、扉を閉めた。

「薄情者おおおおっ!!?」

サタンの叫びが、後ほど悲鳴に変わったのは言うまでもない。

「……つちゅーわけや。つまり沙の字は何もしてへんし、ウチもされてへん。もちろんウチもしてへんで？」

「……じゃあ、わたしの勘違い……？」

「ま、そうなるわな」

あの直後、一撃の元にサタンをのしたアズミは、気絶から回復した少女から事の成り行きを聞いていた。その周りではカナタが黙々と片付けをしているのだが、話している二人は欠片たりとも手伝う気がないようである。

ちなみに、この惨劇の原因になった少女の名前は木実・K・立花^{このみ}。生徒会三年執行部長を務める神出鬼没な長身の美女である。金髪なのはイギリス人とのハーフだからとか（本人談）。あと、関西弁なのは関西育ちだかららしい（これも本人談）。

話を聞いたアズミは気絶させ……もとい、気絶したサタンが寝かされているソファにチラリと一瞬だけ視線を向けたが、何もなかったかのように目を逸らす。

「そ、そう言えば立花先輩。どうして天井なんか人居たんですか？」

「ん、それは……これ」

「……なんですか、これ？」

完全に話をごまかそうとしているアズミ。とはいえ、そんなことをしてもサタンを一発KOした事実には変わりはないのだが。

コノミが示したのは自分の足元の靴。ではなく、ゴムブーツを変形させたような物体で、アズミがおそるおそる触ってみると『ぶ

に』という弾力のある感触が返った。

「柔らかく……はないですけど、硬くもないですね」

「ああ。なんか最近発明した特殊素材を使ってるらしいで」

「……発明？つてことは……」

「たぶん澄すみの考え当たってるわ。双子の発明で、『カエル君2号』

やて。壁歩きできるゆーてたから試してみたんや」

「また変な物を……。なんで先輩はそんな怪しい道具を試しちゃうんですか！　というかなんで2号？　1号見たことないんですけど」

案の定、自称天才科学者の二人が作ったようだ。だが壁を歩いていたはずのコノミが天井に至ったのは何故なのだろう？

「1号は爆発したらしいで？」

「なんで壁歩きの道具が爆発？！　よくそれ知ってて試しましたね？！」

「ははは、結局2号も欠陥品やったしなー」

「笑い事じゃなーい？！」

「笑い事や」

「断言した？！」

あつはつはと危機感の欠片もなく笑うコノミに、アズミはやや辟易していた。

（こういうのはサタンの役目なのに……なんで寝てんのよ！）

とか、完全に自分を棚に上げた考えをしているようだが、そもそもサタンを気絶、もとい寝かせた直接の原因はアズミである。責任の押し付けもここまでくるといっそ清々しいほどだ。

「ところで澄。今日は自分らだけか？」

「？ はい。というかわたしたち以外の一年生は会議じゃないと滅多に来ませんよ？」

「せやない。いつもここに居るメンバーもや。先に帰ったナギとナミにしか会ってへんから、不思議に思てな」

「確かに、誰もいないのって珍しいですよね……」

基本的に、放課後の生徒会室には必ず数人のメンバーが在留している。生徒会長のミカミ、副会長のクロスはもちろん、部活などの用事がないメンバーが数人以上居るのが常であり、誰もいなくなることは滅多にない。会長、副会長のどちらもないというのはありえないと言っているほどなのだ。

「……ミ 会長は用事で休み」

「へ？」

「……メール、来てた」

片付けを終えたらしく、サタンが横になっているソファ近くの椅子に座ったカナタが淡々と言う。

あまりにもあっさりと会長不在の理由がわかり、アズミは脱力した。だが、コノミは何故か不思議そうにカナタを見ている。やがてふむ、と息をついてから口を開いた。

「……会長が用事、つても珍しいっちゃー珍しいけど……なんで彼^かの字に連絡するんや？」

「……………」

「あ、そう言えば確かに」

「さっきも会長をミカミと呼びそうになったし……仲ええんか？」

「……………ミカミは」

「「うん？」」

興味津々といった様子の二人に、カナタはどことなく面倒そうに言う。

「……お」

「「お？」」

「あ、サタン」

「「？」」

突然そう言っサタンを見たカナタと同じようにアズミたちもそちらを見ると、サタンは目が覚めたらしくゆっくりと身を起こした。そしてギギギギ、と機械のように首を回し、アズミを向くと

「なに話してたんだ？」

「え、あ」

「……いや、違うな。なにを、話してるんだ？」

「えっと、それは、その……カナタと会長の関係について、です」

なぜか敬語になるアズミ。そんな彼女をいつも通りのだるそうな目で見たと、サタンは表情を全く変えずに言った。

「そっかあ、勘違いで気絶させた相手ほっというんなどうでもいいこと話してたのか。あははははは」

「え、あの、サタン？」

「……どうでもええんかそれ？」

「少なくとも今は関係ない」

「ならええわ」

ぱつさりと言い切られてしまったので、大人しく引き下がるコノミ。それさえも今はどうでもいいらしく全く気にしていないサタン

だが、アズミに対してだけは違った。

「さてアズミ」

「はっはいっ?!」

改めてアズミに向き直り、サタンが口を開いた。当たり前というべきか、目が欠片たりとも笑っていない。それに対するアズミの返事は、自然と引きつったものになり……

「右と左、どっちがいい？」

「な、何が？」

「もちろん……殴る腕のことだが？」

何がどうしてももちろんになるのかはわからないが、どうやらアズミを殴ることは決定済みらしい。

「お、女の子に手え出す気?!」

「人を攻撃して気絶させるような奴を俺は女とは認識しない」

「……………マジで殴るの？」

「安心しろ、手加減はする。……………たぶん」

「なんか今付け足したよね?!めちゃくちゃ安心できないんだけど?!」

「……………ちっ」

「舌打ちっ?!」

そんなコント（当人たちは至って本気）を傍観していたカナタとコノミは、サタンから離れるように生徒会室の奥側のソファに移動し雑談を始めていた。

「で、結局会長との関係って何なん？」

「……………幼なじみ」

「幼なじみか。……………苦労したやる？」

「……………（コクリ）」

「やるなあ……………」

……………果たしてこれが雑談と言えるのか甚だ疑問ではあるのだが。

「そのこの二人っ、何のんびりしてるの?! 仲間がピンチなんです
がっ?!」

「今回ののは自業自得や」

「……………因果応報」

「四字熟語での的確な返答をどうもっ!」

半ばキャラが崩壊している気がしないでもないアズミに対し、我
関せずな雰囲気を出しているカナタとコノミ。……………とは言え実際力
ナタは全く関係がない。が、そもそも事の始まりの原因である張本
人は、いつの間にか取り出したティーセットで紅茶を飲んでいた。

「先輩紅茶飲んでる暇があるなら助け……………!」

「ちなみにアズミ。利き手でも本気で殺^やるからな」

「『やる』のやの字がおかしいしまずアンタは両利きでしょ?!」

「あ、そうだったな」

「わざとらしっ!」

「まあ何にしろ結果は変わらないということだ」

「勝手にまとめるな!」

ギャーギャーと騒がしい二人を後目に、カナタは近くにあった紙
束を手に取り読み始めた。……………一瞬後、ドアが勢いよく開いたかと
思つと、ドアを開けた人物がすぐさまアズミを背にサタンの前に立
ちふさがった。

「大丈夫ですかお嬢さん？」

突然現れキザったらしいセリフを吐いたのは、金髪の少年　十握スサだった。その上、アズミの顔を覗き込むようにして手を差し出している。

最初は驚いていたアズミだが、やがて笑顔になり……

「きしよい」

暴言を吐いた。

「きしよッ?!　なぜだ?!」

どうやらショックを受けているらしいスサ。だがさらにアズミは言葉を重ねていく。

「きしよいものはきしよいんだからしょうがないでしょ。何がお嬢さんよ鳥肌立つわ。この尻軽男」

「……というかお前、俺の邪魔すんなよ。このエロ魔神が」

「なんで二人ともオレに対する暴言だけは息ぴったり?!」

「うるさい馬鹿」

「黙れバカ」

「女好きのナンパ野郎」

「脳内ピンク星人」

「……何この仕打ち」

前後からの辛辣な言葉の応酬に挫けそうになっているスサ。……助けたはずの相手にまで言われたら誰だって精神的にキツイだろうが。

とは言え、持ち前のタフさでなんとか立ち直ったらしいスサは言葉の嵐の合間を縫ってようやくサタンに話しかけた。

「な、なあサタン。事情はよく知らないけど女性に手をあげるのはどうかと思うぞ?」

「アホエロ星じ …… 男性を武力で気絶させる女性は女性に分類できるのか?」

一瞬スサの動きが止まる。が、すぐに真顔で言った。

「女性は女性だ」

「なんで真顔なんだよ」

「ともかく! オレの愛するアズミちゃんに手をあげるのは許さないぜ!! どうしてもっていうならオレを殴」

「わかった」

「れぐほあっ?!」

ためらいもなく右ストレートを叩き込んだサタン。それを見たアズミが……

「わたしも」

と言って何故かサタンに加勢し、サタンもそれを止めず二人でスサにコンボを決めていった。

……因みに、アズミとスサの関係は助けたのに暴力を振われている現状から推して知るべしである。

「今日も平和やなあ」

「……………そうですね」

そして今までの会話と、今聞こえる耳障りな音と悲鳴をBGMに、
コノミとカナタはゆっくりお茶をしているのであった。

「ぎゃあああああああ
！！！！」

しばらくして、スサの断末魔っぽい声が放課後の校舎に響き渡っていった。

とある出来事の顛末（１）（後書き）

お久しぶりです。２ヶ月ぶりの更新となりました万神奮闘記！、今回はちよつと長めです。しかも（１）です。

実は別に今回の話はなくても良かったりするんですが（オイ、石榴石が決めていた生徒会メインメンバーがこの話で出揃いました。最後のメンバーはもちろんあの少女です。

あと、この中編はできれば夏休み中に終わらせるつもりです。気長にお待ち下さい（え

追伸：基本的に新キャラが出る度にキャラ紹介も更新してますので、良かったら見てください。特徴などを本編よりわかりやすく書いてます。

とある出来事の顛末（2）

サタン、アズミ、スサという騒がしい三人を後目に手に取っていた紙束を読むのを再開したカナタは、それにつけられたタイトルに長い前髪の下の目をわずかに見開き呟いた。

「……………入寮生歓迎会？」

「ん、それが。明日の夜、体育館で文字通り入寮生の歓迎会をするんや。自分らみたいにならなから入寮してた生徒には実感ないかもしれへんけど、入学式前日に入った新入生もおるからな。一応生徒会主催やけど、まあ生徒会には寮生が多いし、顔合わせついでに騒ごーっちゅう魂胆やろ」

最後の余計な言葉を含めたコノミの説明を聞きながら、カナタは淡々とプリントを読み進める。途中まで読んだとき、急に彼の動きが止まった。

「……………先輩」

「何だ？」

「……………これ」

そうやって紙のある一部分を指し示すカナタに、コノミは鷹揚おつように頷く。

「ああ、ダイジョーブ大丈夫。バレんかったらええって。……………それとも、こーゆーの駄目なタイプなんか？」

「……………違う」

「なら」

「いい加減助けるーっ!!」

「あれ？断末魔っぽい悲鳴上げてた割には元気やな」

部屋の中を逃げ、駆けずり回りながらスサが叫んだ瞬間、彼を追いかけていたサタンが正面から何かにぶつかり……

「ふぎやつ！　ってー……………あ」

その体勢のまま自分を受け止めた相手を見上げたサタンは、急に顔をひきつらせ相手を呼んだ。

「あ、兄貴」

「一体何をしてるんだ、サタン？」

サタンの兄にして生徒会副会長・紅宮クロスは呆れたような目をしてはあ、と大きくため息をつく、自分にもたれかかっていたサタンを支えて立たせ……拳骨を落とした。

「いっつ！」

「「あ」」

「うっわ、痛そー」

部屋の入り口からいつの間にか顔を覗かせていた月読ミコト、子津ユスケが驚いて口を開き、少し遅れて兎上マサトがからかうように言う。生徒会室内のアズミたち三人は、未だ何が起きたか理解しきれず茫然としている。

やがて、いきなり頭の頂点を殴られ悶絶していたサタンがバツと顔を上げた。

「……兄貴っ、何するんだ！　ぶつかったのは悪かったけど、何も殴ることはないだろ！」

「ぶつかったぐらいで誰が殴るか。自分の胸に手を当てて考える」

一瞬『は？』というような表情をしたサタンだが、わずかに悩んだあと右手を胸に当てた。

（（うわ、ホントにやった））

……その場にいた全員が思った通り、素直と言つべきか、馬鹿正直と言つべきか。なぜ悩んだのかさえ疑問である。

結局わからなかったらしく、首を傾げるサタンにクロスはわざとらしく咳払いをしてから言った。

「……もういい。ここにいる全員、適当でいいから席につけ。明日の入寮生歓迎会の説明するぞ」

「…へーい」

「わかりましたー」

「……はい」

「りょーかい」

「わかった。あ、みんなその箱から一人一部資料取ってね」

「はいよつと。……つーか回してた方が速くね？」

「はい。あ、確かにそうだね。ミコトさん、ちよつと……」

上からサタン、アズミ、カナタ、コノミ、ミコト、マサト、ユウスケの順に返事を返すと、部屋の中が少し騒がしくなった。適当に資料であるプリント束を回し、各々が事務机やソファ、パイプ椅子などに自由に座り終える。

「じゃあオレも」

「『出ていけ』」

サタン、アズミ、クロスの三人によつて、スサが廊下に放り出され、ついでに鍵が掛けられる。……他に生徒会員が来たらどうするのだろうか？

「おい、オレだけ仲間外れかよ！」

「仲間外れだよ！ お前は生徒会員じゃないだろ？！」

ドンドンと戸を叩くスサにサタンがツツコミ、そのあとドアから離れアズミと共にソファに座る。それを確認してから、いつもはサボリ魔が座っている会長席に腰を下ろしたクロスが口を開く。

「詳細はその資料に書いてあるから、概要だけ説明するぞ。まず日程は四月十九日土曜日、つまり明日の午後七時に始まり、個人の判断で撤収。細かな掃除や片付けは翌日の日曜日に行く。会場は体育館。参加者は生徒会役員全員と今年度の新入寮生……とは言え参加は希望者のみだ。一応主催は生徒会になってるから、参加しておくに越した事はないがな。ちなみに費用は全額理事長持ちだ」

「『はい？』」

突如サタンとアズミが素っ頓狂な声を上げた。その声に驚いた何人かが二人に振り向いたので、慌ててアズミが口を開いた。

「え、でも新入寮生ってかなりいるんですよ？！それに生徒会役員も加えてパーティーするのに、全額理事長持ちって大丈夫なんですか？！」

「大丈夫だ」

「まず大丈夫ね」

「平気だろこれくらい」

「理事長なら平気だよ」

「ま、大丈夫やるなあ」

「……」「金持ちだから（な・ね）」「……」

「は、はあ……」

その迫力にためらいがちなながらも頷くアズミ。先輩全員の理事長のその辺の認識については、どうやら意見は一致しているらしい。さらにマサトが続けた。

「こんな馬鹿でかい高校とその付属中を作れるような奴が金になんかに困るかよ。それに、理事長は天下の万神コーポレーションの社長だぞ？これくらい問題ナシ」

万神コーポレーション。それは日本有数の会社の一つで、ジャンルを選ばず手に掛け、その全ての分野において成功を納めている、いわば総合会社である。食品、衣服、建築、娯楽、医療、その他。万神コーポレーションが手をだした分野は次々と発展し、日本の進歩に大きく貢献したとさえ言われるほどである。

そんな大会社の社長を務めるのが、万神高校の理事長ということなのだが……

「……俺、未だにあの理事長が社長だと思いたくないんだけど」

「まあそうだけど……でも、たぶんおそろくきつと社長だし……なら、これくらい大丈夫ですよね？」

サタンのぼやきに対しアズミが非常に微妙に応えた。……ここまで生徒に言われる理事長、もとい社長とは一体どんな人物なのか気になるところだ。

アズミが指した資料の一枚には歓迎会の予算が印刷されており、彼女が示して初めてそこを見た全員が各々異なった表情をしていた。

「うわ、去年よりも高くなってる」

と、驚きながらミコトが。

「うちらのときからすると二倍や」

と、呆れたようにコノミが。

「つーか絶対こんなにいらねえだろ！」

と、苛ついてマサトが。

「この資料作ったのって副会長ですか？」

と、冷静にユウスケが。

「ああ。……でも確か天照が確認とか言って印刷前に見てたような……」

と、眉をひそめてクロスが。

「あ、そういえば会長さんってなんで休みなのかカナタ知ってる？」

と、首を傾げてアズミが。

「……………会長、予算アップしてもらったから色々買いに行くって」

淡々とカナタが言い、

「.....は？」

一瞬遅れて全員が茫然とした声を上げた。

「またアイツは……！」

「……何買うつもりだ？食べ物や飲み物は全部明日用意するんだろ？」

「会長の事だから、夜は肝試し！とか言いそうだね」

「いま春やで?! あー、でも完全に否定できへん!」

「夜桜見たいとか言って桜をわざわざ持ってきたりしませんよね？」

!

「……ちなみに、携帯電源切られた……」

「ええええつ？！」

ミコトが唸り、マサトが尋ね、ユウスケが予想し、コノミが叫び、アズミがうろたえ、カナタが呟く。六者六様、呆れと怒りから半ばパニックになってしまっていた（カナタはよくわからないが）。だが、

「……サタン、それに夜風と空嶺は校内を、兎上と子津はヤツの自宅周辺の住宅街を探せ。おれと月読は他の生徒会員に呼びかけて街中を探索する。目撃情報などはすぐ他のメンバーに回して、一刻も早くヤツを発見し連れ帰れ。……異論はないな?」

クロスは素早く席を立つと、うろたえる全員に指示を出した。一瞬にして部屋の中は静まり返り、意味を理解した直後全員が同意の声を上げ

「いやだ」

なかった。

「は？」

アズミがぼかんとした顔で自分の隣に座っている少年を見た。他のメンバーも驚いて少年に目を向けている。……無表情な力ナタとクロスを除いて。

そんな彼女らの反応に、少年　サタンはあからさまな溜め息をつくと顔をしかめて言った。

「だから、やだって言ってんの。なんであんな会長探しに放課後潰さないといけないんだよ？　めんどくさい」

「ちょ、ちよつとサタンいきなりどうしたの？　さっきまで嬉々としてスサ蹴ってたのに！」

「嬉々として蹴ってたのはお前だ！」

新事実発覚。人を蹴って嬉々としているとは、アズミはどこまでスサを嫌っているのだろうか？

「ともかく、会長探しなんてするぐらいなら俺は帰る」

そう言ってソファから立ち上がったサタンは、部屋のドアに足を向けた。

「子供^{ガキ}か、お前は」

「あゝ？」

後ろからかかった声に、凄みながらサタンが振り向く。そこにあったのは案の定クロスの姿。サタンはわずかに眉を寄せ、いつも悪い目つきをさらに悪くして口を開く。

「……誰がガキだつて？」

「お前だと言つただろう、サタン。いや、今時子供でさえやらなければならぬことぐらい判るぞ。やりたくないからと言って拒否するのは子供以下の反応だな」

「……！」

「そんなことだから運動以外のこと、特に勉強ができないんだ。もつと協調性を身につけたらどうだ？」

「……勉強は、関係ないだろ」

「なくはない。勉強も集団生活の中では必要になってくる。嫌でも妥協しなければならぬ物だ。それに、勉強を除いても特にお前は苦手なものが多くことは自覚してるんだろう？……サタン、聞いているのか？」

「……いい加減にしろよ兄貴っ！」

ズバンツ！！とサタンが机をぶち抜きそうな勢いで叩き、叫んだ。

「……何をだ？」

「俺はなあ、昔っから兄貴の、その気取った態度が大っ嫌いだったんだよ。そりゃ兄貴はなんでもできるし、頭もいい。けど、だからって俺にいちいち指図すんな！毎回毎回偉っそうに、鬱陶しいんだよ……！」

その一連の動きを冷ややかに見ていたクロスが、ゆっくりと口を開く。

「……それだけか」

「なに？」

「言いたいことはそれだけか、と言つたんだ」

瞬間、サタンの動きが止まった。

「なあ玄^{くろ}の字、さすがに言い過ぎ」

「部外者は黙ってる」

とつさにコノミが間に入るが、クロスの一言でバツサリと切られてしまい、一瞬むっとした表情を浮かべ仕方なく引き下がる。やがてサタンの肩が小さく震えだし、その震えは徐々に大きくなっていった。

「……………の、……………ろっ」

「聞こえないな」

「……………にきの、兄貴のバカ野郎っ！馬に蹴られて死んじまえっ！！」

（（（何故に　！？）））

サタンの非常に微妙な言葉に、クロスとカナタを除くその場にいた全員が心の中で叫んだ。

「え、あ、ちよっとサタン！？」

扉の開く音がしてアズミが慌てて声を掛けたときにはサタンの姿は生徒会室から消えており、急いで廊下に出ても既に後ろ姿さえ見えない。おまけに、さっきまで五月蠅くドアを叩いていたスサもいつの間にか居なくなっている。

しばらくして、クロスがポツリと言った。

「……………俺、人の恋路の邪魔したか？」

（（（そついう問題?!）））

クロスの言葉に再び皆の心境が一致。真剣に見えるあたり、どうやら本気で言っているらしい。

「……あーもう、何なのこの兄弟の妙な天然さはあ……!」

「あいつら、あれを素で言ってるからな………つーか追いかけるよ兄」

ミコトのぼやきを肯定したあと、ぼそりとマサトが呟いた台詞。それは全くもって正論だった。

一方、部屋を出て行ったサタンはというと……

「おい」

「……………」

「おいサタン!」

「……んだよ、五月の蠅」

「オレ害虫?!」

何故かついてきたスサと共に校舎を出たところだった。運動場や体育館から響く運動部の声が、正門に向かって歩く二人にまで届いてくる。

「……まあいいや、どうしたんだよいきなり飛び出して来て。それにとっさについて来ちゃったけど、どこ行くんだよ？」

「寮。……それ以外のとこいたら絶対生徒会の誰かと会うからな」

「ふーん。でもさ、なんでお前いきなりキレたんだ？ 話だいたい聞こえたけど、紅宮先輩特におかしいこと言ってないぞ？」

確かにクロスが生徒会室に入ってきた時のサタンはいつもと変わりがなく、さらに歓迎会について話の時も呆れていただけで怒る素振りにはなかった。

とすれば……

「なんか会長探せって言われてすぐ機嫌悪くなった感じがしたけど、実際どうなんだよ？」

「あ、生徒会室にカバン忘れた」

「ガン無視?!」

ガーン、と非常にわざとらしくショックを受けているスサを一瞥すると、サタンは面倒そう……というより不機嫌そうに口を開いた。

「別に会長探すのが本気で嫌だった訳じゃないんだよ。そりゃ面倒だけど、ただ……」

「……ただ？」

「……一回やらないって言い出したら後に引けなくなったんだよ！ 加えて兄貴に勉強のこと言われてキレちゃったし」

「うつわー馬鹿だ！馬鹿がいるぞ！」

「いっぺん死ぬか？」

「死にたくないですごめんなさい」

笑顔で拳を構えるサタンに、スサは素直に腰を折り頭を下げる。謝るぐらいなら最初から言うなとサタンは思ったが、どうせ言っ

も治らないので言うのをやめた。注意してやめるなら、スサはこんな性格になっていないだろう。

「……はあ」

「何だよその可哀相なものを見る生暖かい目は！なんかオレに対して失礼なこと考えただろ？！」

「おお、よくわかったな」

「馬鹿にすんな」

「実は……お前の来世のことを心配していた」

「あれ、将来は？ オレの将来は心配する価値もないのか？ もう手遅れってことか？！」

「お前の来世は……ゾウリムシだ」

「微生物確定っ？！」

「だから、お前が発生した水辺が干上がらないか心配で……」

「それはオレを心配してるのか？ それとも水辺の心配か？！」

「水辺の心配だ」

「それって暗にゾウリムシになったオレのせいで水辺が干上がるって言ってるんだよな？！」

「なんだ、わかったのか」

「わかるのがそんなに以外か？！ お前の中でオレの評価どんだけ低いんだよ！」

「ワースト一位」

「最下層っ？！」

そんなたわいもない（？）会話をしているうちに二人は男子寮の前に到着していた。寮生の大半が部活もしくは生徒会に入っているためか、建ち並んだ寮は人の気配があまりなくとても静かだ。

「じゃーなスサ。他人に迷惑かけんなよ」

「よし、女子寮に忍び込もう！」

「やっぱ死んどけ」

ズドン、と一発蹴りを喰らわせると、悶絶して転がるスサを放置しサタンは寮の門をくぐった。

そのまま自室に直行し、鍵を開けて中に入る。

「……言い出したら引けなくなっただのも本当だけど……どうせ俺は、兄貴に何も勝てねえよ」

小さく呟かれた自嘲の言葉は、言った本人の耳にさえ届くことなく扉の閉まる音によって掻き消えた。

とある出来事の顛末（2）（後書き）

コノミの関西弁があっているのか最近非常に不安です……

えー、今回の話でわかった方もいらっしゃると思いますが、この『とある』の主人公は紅宮兄弟で、この二人やそれ以外にも今まで出ていなかった微妙な関係が現れてくる予定です。

とある出来事の顛末(3)

「お兄ちゃん」

「お兄ちゃん！」

「遊ぼうーよー！」

「はいはい」

「あ、はいは一回なんだぞー！」

「なんだぞー！」

「わかったわかった、宿題おわったら遊ぶから」

「やったー！！」

「でも、お前らは宿題おわったのか？」

「う」

「サタン？」

「……やってない」

「×××××？」

「……まだ」

「なら、遊ぶのはなし」

「やだ！ ぜったいやだ！」

「ぼくもやだ！ 宿題ちゃんとするから遊んで！」

「ぼくもする！」

「わかったよ。じゃあおわったら遊ぶからちゃんとしてこい」

「ほんと？！ 約束だよ？！」

「ああ、約束だ」

「やったあ！ はやくおわらせよう、×××××！」

「だね、サタン！」

「あとで見せっこしようー！」

『見せつこ〜!』

『あ、こら! ちゃんと自分でやれよ!』

『はあーい!』』

ぎい、とベッドを軋ませ体を起こしたサタンは、ゆっくりと大きく息を吐いた。

徐々に闇に慣れ始めた目で辺りを見回すと、窓から差し込む月明かりで照らされた部屋の様子が薄ぼんやりと浮かび上がっていた。どうやら、まだ真夜中と言っていいような時刻のようだ。

一瞬自分がどこにいるのかわからず慌てそうになったが、すぐに寮の自室であることを思い出す。どうやら、あのあとベッドに倒れ込みそのままふて寝してしまっただけらしい。

そろりと布団から抜け出し、二段ベッドの上の段を覗き込む。当たり前だが、そこには穏やかな寝息をたてているカナタがいた。

ゆっくりと自分のベッドに戻り小さく息をついたサタンは、ふと括りっぱなしになっていた後ろ髪に気付き乱暴に紐を外す。元々のくせと寝癖が入り混じって跳ねた長髪が背中に広がり、服越しのその柔らかい感覚にまたため息をつく。

外見的にも内面的にも似ていないと良く言われる自分たち兄弟の数少ない共通点、それが髪だった。

色も違うし長さも違うが、生まれつきの癖毛と髪質の柔らかさだけはそっくりなのだ。そして、そのことを改めて感じるたび複雑な気分になる。……何故、自分は似なかったのだろ。何故、自分だけが。

少ししてパンツ、と自らの両頬を叩き、どうしてもネガティブに偏りそうになる思考を無理やり現実に戻した。考えないのが一番楽なのは、誰よりも自分が知っている。

「……シャワー浴びよ」

時間帯にもよるだろうが問題はないはずだ。消灯時間は決まっているものの強制ではないし、どうせ誰も起きていな……いと
も限らないので一応時間は確認しよう。後で文句を言われたら面倒だ。しかも夜中に電気をつける訳にはいかなないので面倒だが携帯を見るしかない。が、そこでふと思い出す。

「携帯、カバンの中だ……」

そしてそのカバンは生徒会室に置き去りの状態である。仕方ないので諦め、風呂場に向かう途中に足が何かにぶつかった。

「つてー……あ」

それは灰色の布地に緑と茶色の迷彩柄のラインが入ったりユック
忘れてきたはずのサタンのカバンだった。一瞬何故ここにある
のかわからずぽかんとするが、すぐにカナタが持つて帰ってくれた
のだろうと思いきり……情けなくなつてまたため息が出た。

朝起きたら礼を言っておこうと決め、教科書・ノートがほとんど
入っていないカバンを探つて携帯を取り出す。生徒会用にと支給さ
れたシンプルなデザインのそれには『紅宮沙炎』と書かれた銀色の
小さなプレートが嵌っており、黒い本体の中で唯一月明かりを反射
していた。ストラップは同じ物が二つ付いており、それが引っかか
らないようにして携帯を開く。

(……四月十九日土曜日二時十三分、か)

本当に真夜中だった。これなら電気さえつけなければ大丈夫……
ということにしておこう。だが、

(……朝ちゃんと起きれるのか、俺……?)

結局は今気にしても仕方がないことなので忘れることにして、着替えとタオルを持って脱衣所に入り、脱いだ服は適当に洗濯籠に放り込んで風呂場に行く。暗くてあまりはつきりとは見えないが、一か月以上使っているため物の位置は手に取るようにわかるので特に問題はない。

シャワーのコックを捻り、強めの水を頭からかぶる。叩きつけられる水の痛さと冷たさが心地良く、サタンはしばらくそのまま目を閉じてシャワーを浴び続けた。

その間に、さっき見た夢のことについて考える。大分昔……それもサタンたち兄弟が小学校低学年だったときの風景のようだった。今までに何度となく繰り返し返した会話のため正確な時期はわからないが、見た目的にはそれくらいだろう。

ズキ、と小さな痛みを覚えた気がして、サタンは目を開きシャワーを止めた。

水を吸って重くなった長髪が身体に張り付き、雫を滴らせる。肌の上を滑る水滴がやがてタイルに落ち、他の水と混ざって排水溝に流れ込んでいくのをぼんやりと見つめた。

あんな夢を見たのは兄と喧嘩をしたせいだろうとサタンは思う。一方的に自分が喚いていただけで喧嘩と呼ぶにはいささかおかしい気がしたが、あんなにクロスに反抗したのは久しぶりだった。とはいえ、中学校入学のときから寮に入っていたクロスと小中学と地元で進学したサタンとではあまり会う機会がなかったため、変という

ほどのことでもないのだが。

(…………最後に喧嘩したのって、まだアイツがいたときだったよな……)

ズキン、とまたどこかが痛んだ気がした。実際は怪我や病気などではないからどこも痛むはすがない。錯覚だ。

ふと、よく二人がかりでクロスを言い負かそうとしていたことを思い出し、サタンは思わず苦笑した。そしてまた、どこかが……何かが痛む。兄と喧嘩したことを考えれば考えるほど、昔のことを忘れようとすればするほど、それはひどくなる。

その痛みに耐えられない訳ではなかったが、生来ややこしいことや面倒事が嫌いなサタンは喧嘩についてあっさり一つの判断を下すと、手元のコックを操作し今度は熱いシャワーを浴び始めた。

顔にかかる髪を払いのけながら、はあ、と大きく溜め息をつく。

(…………兄貴との喧嘩なんて、さっさと謝っておくのが一番だ)

そして、水で冷えた身体が次第に温められるのを感じつつサタンは再び目を閉じた。

翌日の朝、校庭の北端にある古い弓道場に一つの影があった。

影は流れるような動作で矢をつがえ、弓を引く。が、すぐに射ることはせずにそのままピタリと静止する。

しばしの静寂。重心移動のために起こる床の軋みも弓矢のぶつかる音も衣擦れの音さえも一切存在しない、唯一風の通り抜ける音だけがこの場の空気を震わせていた。

そんな中、不意に訪れた完全な無音。風がやんだほんの一瞬。

矢が、放たれた。

タンツ、という音と同時に、世界に音が戻ってくる。風、木々のざわめき、鳥のさえずりなどが途絶えることなく空気を揺らす。

そんな朝の喧騒が響く弓道場に存在する白と黒の的の中に、矢が刺さった物が一つだけあった。先ほど放たれた矢。それは的の中央をわずかに外したところに突き立っていた。

「……不調みたいだな、クロス」

横からかけられた声に反射的に振り向いた影　クロスは、いつの間にか出入り口にもたれていた声の主を目に留めると、ふん、と小さくに鼻を鳴らした。

「なんだ弓継ゆみつぎか」

「なんだ、とは失礼だな。それでも一応部長だぞ？」

「自分で一応とか言ってるや世話ないな。それに、同い年の奴を敬う気はさらさらない」

「ははっ、そりゃそーだ」

そう言って笑ったのは、弓道部部長の弓継ゆみつぎ。一年の時から弓道部に所属するクロスにとって、親しい友人であると同時に信頼できる人物だ。

「にしても珍しいな、あんたがこんなに早く来て練習してるなんて

部活は昼からだぞ？」

「それはお前にも言えるだろう。まだ朝　　9時ぐらいか？　　なのに来てるなんて、よっぱどの中毒だな」

「別に来るつもりはなかったんだがな。ちと用事で職員室に行ったらここの鍵がないもんで、誰がいるか見にきたんだよ」

「好奇心旺盛なことだ」

「まあな」

「否定しないんだな」

「それが俺だ！」

「意味が分からん」

少しだけ眉を寄せ呆れた口調をしているものの、クロスは普段の威圧的な雰囲気纏うことなく他愛もない会話を行う。生徒達に生徒会長であるミカミの見張り役として畏怖されることが多い彼を友人として気安く扱うイテの性格が、クロスにそうさせているのだろう。　　実際、平時のクロスに軽口を叩こうものなら、その切れ長の目でもって射殺するような視線を向けてくるのが常なのだから。

……だが、それを除いたとしても今日のクロスには　　大半の者は気付かないほどわずかにだが　　覇気が欠けているようにイテの目には映っていた。

「しかし、らしくないな。あの状況、あの一瞬の最高のタイミングで射たのに中心を外すなんて。普段なら強風でもド真ん中を射抜くくせに」

「そんな神業、できるのはお前くらいだ。おれはしがない平部員だよ、『現代の那須与一』？」

「平部員ねえ……どの口が言つか、元『現代のオリオン』？」

「この口だ」

「……即答することか、それ」

平然としたクロスに対し、呆れかえるイテ。ほんの少し会話する間に何故か二人の態度は逆転していた。端から見るとかなりおかしい光景に違いない。

名は体を表すの如く、イテは弓道の世界において大人顔負けの有名な射手だった。全国でもトップレベル、どんな悪条件の時でさえ中心を射抜くその姿から『現代の那須与一』と呼ばれる名手。

クロスの場合はイテが元と付けたように今有名という訳ではない。だが中学の頃は彼に並ぶほどの人物として、ギリシャ神話の弓の名手『オリオン』とあだなされていた。諸事情により大会などに出ることは止めたが、今でも弓道を続けているため腕は欠片たりとも落ちていない。

つまり、この二人は見る者が見ればとても凄いはずなのだが……その会話の内容は微妙なものである。

「ところで、今日の部活には参加できるのか？　ここ最近滅多に来てないし、後輩たちが寂しがってるぞ」

イテの言葉にクロスは一瞬だけ視線を宙にさまよわせたが、やがてため息をついた。

「……すまないが、今日も無理だ。明日は行くつもりだが……」
「？　なんか用事か？」

その疑問に対し、クロスは相変わらずの無愛想な顔で頷く。

「ああ。今夜、新寮生の歓迎会があるからその準備がな」
「それってアレか？　毎年恒例の」
「そうだ」

すると、イテはクロスの真横に腰を下ろしたあと、天を仰いで残

念そうに言った。

「あー……、俺も寮生だったらなあ。パーティーの料理って星河先生が作るんだろ？ 絶対滅茶苦茶旨いだろうな……」

「残念だが、歓迎会に参加できるのは新寮生と生徒会役員だけだ。どう転んでもお前は参加できん」

その台詞に、イテは肩をガクリと落とす。そして、しばらくしてから恨みがましい目で隣に立つ友人を睨んだ。

「……いつもながら辛辣だな。ささやかな夢も粉々だよ。……ま、元々俺に寮生活なんかできるわけないし、仕方ないか」
「その通りだな」

イテが今度は座ったまま器用にずっこけた。

「……いや、そこは多少否定してくれよ。あつさり肯定されると傷つくんだけど」

「何を言っている？ お前の寝相の悪さといびきは一種の公害に等しい。否定の余地もないぞ」

「ひでっ」

「事実を述べたまでだ。それに、あの合宿のときの騒動を忘れたわけではないだろう？」

あの合宿、というのは二人が一年生だったときの冬休みに、弓道部で行われた二泊三日の強化合宿のことだ。そのときイテが夜中に寝ぼけて合宿所の旅館のふすまを蹴破り、翌日の早朝、一日遅れで合流したクロスに叩き起こされた、ということがあったのである。

「……う、あれはホント悪かったって。ちゃんと謝ったし、色々弁

償もしただろ」

少し眉を寄せて言ったイテに、クロスはわざとらしい大きなため息をついてから彼を軽く睨んだ。

「そういう問題じゃない。危うく部員全員が風邪を引くところだったんだ。悪いと思ってているなら治すように努力しろ」

「そんなの言われて治せたら苦労しないって！俺だって毎朝自分の部屋の惨状見るたびに、寝てる自分を殴ってやりたくないよ」
「そこまでいうならおれが殴るが？」

クロスが軽く握った拳を持ち上げる。と、それを見たイテが慌てて叫んだ。

「拳を作るな！　　というか合宿のとき実際に殴った奴が何を今更！」

「結果的に起きたんだからいいだろう」

「どこが？！　あのと一日中腫れが引かなかったんだぞ？！」

「それはすまなかったな」

いっそすがすがしいまでに棒読み無表情でそう言ったクロスに何を言っても無駄だと諦めたのか、イテは黙って自分の弓を取り出すと立ち上がった。そして、静かに矢をつがえ적を見据える。

弓を片付けていたクロスは、場の空気が変わったのを感じ、黙って手を止めた。

タンッ

気付いたときには既に矢が放たれていた。

その矢はクロスと同じの、先に刺さっていた矢の真横　　寸分

の狂いもなく中心に突き立っている。

ふう、と息をついたイテは、ゆつくりと弓を下ろすとそのまま隣に顔を向けた。

その視線を何の感慨もなく受け止めたクロスは、目を逸らし片付けを再開しながら口を開いた。

「流石だな。おれじゃ到底敵^{かな}わない」

「……どーも」

微妙な表情でイテが応えたあとも言葉は続き……

「まあ、そうでなければ襖蹴^{ふすま}破った時点で退部だっただろうしな」
「……それをまだ引つ張るか」

そんな声を見殺し片付け終わった道具を持って腰を上げ、クロスは弓道場の扉に向かった。

「もう帰るのか？」

「ああ。これから歓迎会の買い出しをして、午後から準備だ」

「そっか、頑張れよ」

「あと、さっきも言ったが明日は練習に来るつもりだから、予定が分かったら連絡くれ」

「りょーかい、了解」

手をひらひらさせながら言うイテにまたな、と返し、クロスは扉を開く。

「ま、それだけいつも通り振る舞えるなら大丈夫だな」

ピタリ、とクロスの足が止まった。

「……何がだ？」

振り返り尋ねかけた言葉は短いものの鋭く、固かった。だがイテは飄々として答える。

「そりゃ……弟ちゃんと早く仲直りしろよ、ってことさ」

「……………」

返事はなかった。だが、知っていたのか、という僅かな驚きを霧囲気が物語っていた。

双方無言のまま、しばらくしてクロスは身を翻すと、外から音もなく戸を閉め、去っていった。

一人取り残されたイテは困ったように頬を掻くと、座り込んで携帯を取り出し、昨日の夜届いたメールを見直す。

そこには、昨日の放課後クロスとその弟のサタンが口論をしたこと、二人が険悪な霧囲気になってしまったこと、どうにかして仲直りをさせたいこと……などの旨がやや難解に書かれていた。

差出人は、空嶺彼方。

イテは、クロスの弟であるサタンとその友人のカナタと面識がある。

中学のころのクロスは今ほど難儀な性格をしていなくて、よく弟についての話をしていたし実際本人にも何度が会った。

だがカナタについては一応顔見知りではあるものの、話したことはない。無口なのだろうが、声を聞いたのも数度くらいだ。

なので、教えたはずがないイテのメルアドを何故カナタが知っていたのかかなり疑問ではあったが、内容から純粹にサタンを気に掛けていることが分かったので、多少なりとも協力しようと思ったのだった。

イテはメールを読み返したあと、新しくメールを立ち上げて先程のクロスの様子を打ち込んでいった。宛先は勿論カナタだ。打ち終わり完成したメールを送信したあと、板張りの床に仰向けに横になる。

「……ほんと、不器用なな兄弟だよ。……なあ、空嶺くん」

後日、イテはカナタにメルアドのことを尋ねたらしい。が、

「……………」

という無言の視線に耐えられず、理由を聞くのは断念したそうだ。

とある出来事の顛末(3) (後書き)

夏休み中に終わらせるとか言っといてもう10月です。本当にすみません。しかもまだ続きます。

今回の話は前半暗いし後半喋ってるだけ。特に前半は訳がわからな
いと思いますが、いつかわかるようになるはずです(たぶん)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2724e/>

万神奮闘記！

2010年10月28日05時11分発行